（様式２－２）

Ⅰ　学校の概要

学力向上モデル校事業　　直島町立直島中学校

◆生徒数及び教員数

〇生徒数

第１学年	第２学年	第３学年	特別支援	全　校
１学級 １８名	１学級 ２０名	１学級 ２５名	２学級 2名	５学級 ６５名

〇教員数　　１３名

◆学校の特色

近年、直島は「現代アートの島」として世界の注目を集め、国内外から多くの観光客を迎えるようになり、日常的に外国人を見かけるようになっている。そのような中、生徒たちは、異なる文化や考え方をもつ人々と交流していく機会が多くなっている。

直島町では、昭和 63 年度から町独自に外国語指導助手（ALT）を雇用して英語教育に取り組み、平成 23～25 年度の３回、文部科学省指定研究開発学校として研究を推進し、平成 28 年度からは、教育課程特例校として外国語の時数を増やして英語教育に取り組んできた。また、「読む・書く」の２技能を中心に書くことと発話とのつながりを大切にした英語活動の取組や、その発表のためにタブレット端末を積極的に活用しながら、互いに学び合う学習を通して、直島の特色ある教育活動である英語教育を元に、郷土を愛する心を育むこともめざしている。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

「コミュニケーション能力と豊かな国際感覚の育成」

～デジタル教科書の活用と ICT を活用したペア・グループ活動の実践を通して～

◆研究主題設定の理由

本校では、教育課程特例校で実践を重ねている強みを生かして、ICT を活用したペア・グループ活動を実践し、即興性を取り入れた言語活動とともに、自分の思いを言葉や態度で表すことができるようなコミュニケーション能力を身に付けられる授業の実践を行っている。また、身近な話題で話したことを英語で書く活動を通して、「話すこと」と「書くこと」を関連付けた活動も取り入れてきた。

これらの取組に、学習者用デジタル教科書の有効な活用法や、授業の振り返り等での効果的な ICT の活用法についてさらに研究を重ねていくことで、更なる英語教育の推進と、教員自身が英語によるコミュニケーション活動への理解を深め、指導の個別化や一人ひとりに応じた学習の個性化を図っていきたい。

◆研究内容及び方法

① ペア・グループ活動や授業の振り返り等での ICT の有効な活用法について

② デジタル教科書や ICT を Writing 活動とつなげるための効果的な活用について

③ 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や国際感覚を養うことができるような ALT との交流の在り方について

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

学校で、学級の友達と意見を交流する場面で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使っていますか。

（児童・生徒）※指標：「①ほぼ毎日」のみ

5 月調査	→	目標値	→	11 月調査
6.7%		15.0%		36.0%

普段の授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用していますか。

（児童・生徒）※指標：「①週３回以上」のみ

5 月調査	→	目標値	→	11 月調査
56.0%		65.0%		95.0%

指標の達成に向けた実践

(1)　ペア・グループ活動や授業の振り返り等での ICT の活用

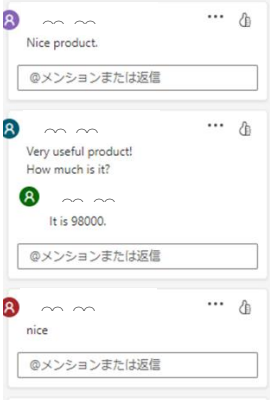
本校では、誰もがもれなく学び合う協同的な学びのスタイルを取り入れた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組み、分かる授業、考える授業、助け合う授業の創造に努め、学ぶ喜びを体得させることで、学級にいるすべての生徒が一人残らず参加できる授業を目指している。毎時間４人以下の小グループによる活動を取り入れたり、学習課題をはっきりと明示するとともに、やや難易度の高い「ジャンプ課題」を提示したりするような実践を行っており、即興性を取り入れた言語活動として、毎時間のはじめに帯活動としてペアでのやりとりをする時間を設けている。（写真Ⅰ）

調べ学習では、タブレットを用いてグループや全体に個人で調べた内容を紹介し、紹介者に対してそれぞれからのコメントを英語で書き込み、それに対しての返信を行うという活動を通して、ペア・グループ活動でのタブレットの活用を推進した。（写真Ⅱ）調べ学習や発表内容の録音を個別に行い、発表内容をグループで共有するなど、協同的な学びのスタイルの確立を目指している。また、タブレットを用いて発表やプレゼンテーションの資料を作成する際には、発表後にそれぞれの発表者に対して個人からのコメントを英語で書き込むことで、自分の発表に関する振り返り等にも活用できた。

ペアで道案内をする言語活動において、タブレットを活用して行った。実際に道案内をする際は、携帯等でその場で調べた内容を伝えることが多いため、検索したときに出てくるような情報を生徒のタブレットに配布した。生徒がどの情報を活用するか、相手の状況や目的に応じて考える力にもつながった。ペア活動では、互いに道案内をする際にインフォメーションギャップを用いて、英語で伝える意味のある「場面設定」を行うことで生徒が活動に意欲的に取り組むことにつながった。（写真Ⅲ）

(2)　活動の様子

写真Ⅰ



写真Ⅱ

写真Ⅲ

◆指標設定と達成に向けた取組

英語で読んだり書いたりするときに、分からない単語や表現があれば、辞書や教科書を使っている。

（児童・生徒）**※指標**：「①そう思う」のみ

5月調査	→	目標値	→	11月調査
66.1%		70.0%		70.0%

指標の達成に向けた実践

(1)　学習者用デジタル教科書やICTをWriting活動とつなげるための活用

本年度より、生徒のタブレットに学習者用デジタル教科書を導入し、使い方やメリットなど、生徒と一緒に使いながら、まったく手探りの状態から活用を開始した。有効な活用方法を模索していく中で、意味やつづりを調べることから始め、いくつかの機能を活用し、生徒と共に授業で活用することができた。特に、Writing活動とつなげるために、教科書の本文を音声で聞くことや、聞く時のスピードを変える機能、マスク機能などをよく活用し、音と文字を関連させて理解できるよう取り組んでいる。難易度を各自で簡単に変えることができ、自分なりの難易度に設定することで、自分に適した習熟度での虫食い音読練習や、ディクテーションなど個別最適な学びに最適である。

(2)　活動の様子

既習内容を使って、話したり書いたりするなどの自己表現活動に進んで取り組んでいる。

（児童・生徒）**※指標**：「①そう思う＋②少しそう思う」の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
100%		100%		100%

指標の達成に向けた実践

(1)　積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができるようなALTとの交流

学習の成果を試す場として、県内からALTを招き、美術館の作品やアート作品、お店など、ふるさと直島について英語で紹介し、生徒が英語でのコミュニケーションを図る「Meet the World」を開催し、ALTとの交流を通して国際感覚を養うことができるようにしている。生徒の感想では「自分が習った英語を使うことができてよかったです。」「ALTの先生とたくさん会話ができました。楽しかったです。」と事前に調べた作品の紹介だけでなく、ALTとの会話も楽しむことができていた様子が伺える。（写真Ⅰ）

また、英語のみで活動を行い、２階から卵を落としても割れないよう、グループで決められた材料のみで工作をする「Egg Drop」という事前学習を１時間設定した。グループでの話し合いや活動などすべて英語で行うため、生徒は試行錯誤しながらも、積極的に英語やジェスチャーを用いてコミュニケーションを図ろうとしていた。（写真Ⅱ）

(2)　活動の様子

写真Ⅰ

写真Ⅱ

◆特徴的な取組

○　ペア・グループ活動

⑴　One Minute Chat

①　ペアを作り、トピックについて１分間チャットをする。

②　選ばれたペア一組がクラスで発表する。

③　言いたかった表現を共有・フィードバックする。

⑵　３人でやりとりを行う、Trio-conversation

①　一人３０秒で話をする。

②　１分間で話したことを文字にする。

③　３人で書いた文字数の平均を計算する。

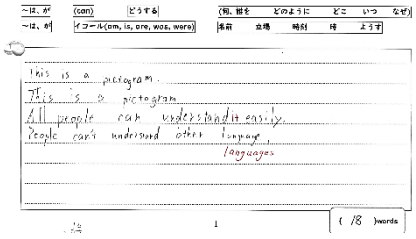
④　自分で書いた文字をタブレットで使って書き直したり、友達に添削してもらったりする。

月	トピック（例）	言語材料
4月	自己紹介	一般動詞
5月	人物の紹介 （私は誰でしょう）	be動詞
6月	週末したいこと	want to
7月	先生インタビュー	疑問詞
9月	夏休みの思い出 (2つの真実と1つのうそ エピソード)	動詞の過去形
10月	人物の紹介 (〇〇について説明しよう)	３人称単数

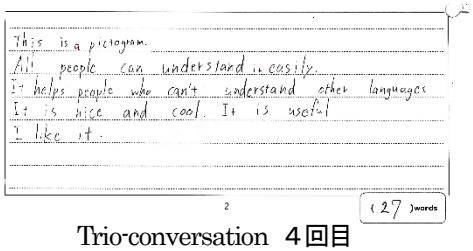
One Minute Chat トピック例

同じトピックで４回行うことで、より詳しい内容で書くことができるようになる。また、単語のスペルや文法は、その都度、ペアや教員、ALT に添削してもらうため、４回目には書けるようになった表現や単語も多くあった。また、ゲーム感覚で「書くこと」の活動をすることができ、話したこと、つまり「音」と「文字」を関連させて活動を行うことで、「書くこと」を苦手とする生徒も参加しやすくなった。

Trio-conversation の様子



Trio-conversation　１回目



Trio-conversation　４回目

○　学習者用デジタル教科書を Writing 活動とつなげるための活用

①　タブレットから聞こえてくる英語の音声をマネしながら、声に出して読んでいくシャドーイング。

②　各自で難易度を選択し、マスクをかけて一人で読む。

③　マスクをかけてペアで読む。

④　英語の音声を聞きながら、流れてくる英語を文字起こししていく、ディクテーションを行う。ここで音と文字を関連させて理解できるよう取り組んでいる。

○　ALT との交流(Meet the World)

①　直島のアート作品やお店を紹介するための、現地での事前学習を実施。

②　事前の調べ学習でタブレットを活用し、自分の言葉で原稿をまとめ、Teams で共有する。

③　事前学習「Egg Drop」で、すべて英語で行う活動の設定。

④　学期ごとに ALT とパフォーマンステストを実施。生徒は自分で難易度を選び、授業で習ったフレーズを使ったり、即興で ALT の質問に答えたりすることができた。

事前学習の様子

Egg Drop での活動

ALT とのパフォーマンステスト

Ⅳ　研究の成果と課題

◆成果

県学習状況調査において、正答率、観点別、内容別、すべてにおいて県平均を上回っていた。特に、表現の能力が高く、これまで本校の課題であった、「書くこと」についても県平均を大きく上回ることができた。全国学力学習状況調査「話すこと」についても、全国平均を大きく上回っていた。これまで教育課程特例校として実践を重ねてきている即興性を取り入れた言語活動に、毎時間の授業で帯活動として取り組んでいるため、生徒は抵抗感なく取り組むことができているのではないかと感じている。毎年実施している標準学力検査においては、教育課程特例校で実践を重ねている日々の取組の成果が表れていると思われる。特に、４領域のうち「話すこと」において、テーマを与えて話したり、相手や目的意識を持って話したりする活動を取り入れてきた継続的な指導が成果に表れていると思われる。これらの学習の成果を試す場として、地域発信型教材である「Meet the World」を開催し、ALT との交流の機会を通して、国際感覚を養うことができるようにしており、普段の授業で生徒が身につけた自分の思いを、言葉やジェスチャーで表すことができるようなコミュニケーション力を試す機会として、あるいは生徒の英語学習への意欲を高めるきっかけとすることができたのではないかと考える。また、小中学校を通して、帯活動から授業、そして「Meet the World」での実践へと既習事項と実践をつなげていくことで、やりとりで用いる表現を定着させ、さらに豊かにしていくことができているのではないかと考える。

学習者用デジタル教科書の活用については、まずは本文の内容を深く理解するためのツールとして活用することから始めた。視察や研修、公開授業や事前検討会での助言等を通して有効な活用方法を模索し、研究を推進していく中から、自分に適した習熟度で個別に重要表現を学習し、音と文字を関連させて理解できるよう一人ひとりに応じた学習の個性化を図ることができるツールとして、また、令和５年度全国学力学習状況調査報告書にある「質の高い言語活動を目指して」の姿に近づいていくためのツールのひとつとして、ペア・グループ活動とつなげて活用していくのが有効なのではないかという方向性が見えてきた。また、学習者用デジタル教科書を用いて、「話すこと」とともに「書くこと」の能力をのばす活動も継続して行ってきたため、生徒の「書くこと」に対する気持ちのハードルを下げることにもつながってきたのではないかと感じている。ほぼ 100%の生徒から「慣れると使いやすい」「便利だ」という声があがっており、このような活用方法を基本として、学習者用デジタル教科書やタブレットを Writing 活動とつなげるためのさらに効果的な活用方法を模索し、今後も継続して、質の高い言語活動をめざして研究を重ねていきたい。

◆課題

全国学力学習状況調査より、「必要な情報を読み取る力」では、他の項目のような優位性が見られなかった。現在は、帯活動でのトピックを「生徒が話しやすい自分の身の回りのこと」に設定することが多いが、「必要な情報を読み取る力」を育成するための一つの手立てとして、トピックから必要な情報を読み取り、相手と会話ができるようなトピックを帯活動や授業の中に積極的に取り入れていきたい。

本事業を推進するにあたり、直島小学校でも本年度より学習者用デジタル教科書や英語学習用アプリの導入が行われた。今後は、直島小学校と連携して作成しているオリジナルの外国語学習指導指針（「New Teaching Plan」）に、学習者用デジタル教科書や学習用アプリの効果的な活用が位置付けられるよう、さらに連携を深め取り組んでいくとともに、直島小学校と協力して言語活動の充実や学習者用デジタル教科書の活用、「Meet the World」を実施できるよう、さらに連携を深め取り組んでいきたい。また、へき地校の特性として、教職員が約３年周期で異動となる中で、今後も円滑な小中連携を目指し、系統的・継続的な質の高い授業実践を維持していくために、教職員研修の充実や学習者用デジタル教科書を活用した教材開発の在り方についても、継続して研究を進め、英語科教員だけでなく、他教科でも今年度の実践を活用できるよう、教職員間の連携をさらに大切に研究を推進していきたい。